

■（１３３）記者が恐れる「読み比べ」、浮かぶ取材の濃淡

富山県の殺人放火事件で逮捕された元警察官が釈放された。最初は容疑を認めていたが、その後の捜査で、本当に犯人なのかという疑問が次々に出てきたためという。殺しを自供した人が釈放される例はめったになく、新聞・テレビは一斉に、全国に報道した。

釈放を決めた検察庁による記者会見の中身をなぞった新聞が多い中、刑務所に勾留されている元警察官に１０回も面会した結果を書いた全国紙があった。一般的に「塀の中」の人を直接取材するのはかなり難しく、この全国紙の記者の技量と熱意に頭が下がる。元警察官が釈放後、被災地で仕事を探すつもりだという「特ダネ」も含まれていた。

同じテーマを一斉に報じた各新聞を読み比べると、取材の濃淡が見えてくる。記者からすれば、相対評価されているのと同じだ。その「通知表」は年に２、３回ではない。平日ならば朝刊と夕刊の１日２回ある。そこで低評価が続くと、取材現場や会社から逃げ出したくなる。

父が生前、通知表の「１」を「４」に書き換えて親に渡したと告白していた。戦後の手書きの時代だ。新聞の成績は書き換え不可。お勧め学習法の「読み比べ」も、記者には怖い。(山)